

# パラグラフリーディング考察 その理論と実践

福嶋 雅直

## 1. はじめに

リーディングの授業において、これまでの文法訳読方式に代わってパラグラフリーディング(paragraph reading)が主流となり、関連する書籍も多数手に入るようになった。しかし、パラグラフリーディングに対する考え方は人それぞれで、確立されたものがない。パラグラフの論理展開が典型的で単純なものならどこの本を見ても同じだが、展開が少し複雑になると、ディスコースマーカー(discourse marker)で全てが解決できるかのような説明が後を絶たない。また、パラグラフリーディングで必ず出てくるトピックセンテンス(topic sentence)についても、人によって定義がバラバラで、ニュアンスや使い方も異なっている。例えば、「パラグラフの第一文がトピックセンテンスで、それをつなぎ合わせれば大意要約になる」というものがあるが、全ての文章に当てはまるわけではない。

指導要領が改定されて「英語で英語を読む」ということが前面に押し出されているが、読解授業が Questions and Answers に終始し、クイズ番組のように英語で問題を出して○×を判定するだけになってはいないだろうか。また、パラグラフリーディングと称してやみくもに各パラグラフのトピックセンテンス探しをさせてはいないだろうか。全ての生徒が答えの根拠となる文を正しく見つけることができるわけではない。間違えた生徒にどうして間違っているのか、どうすれば正しく読めるのかを教えないと自立した学習者を育てることはできない。

ここでは、パラグラフだけでなくテキスト(文章全体)を理解する手段として、パラグラフリーディングの理論と方法論を考察する。また、これを踏まえた大意要約のストラテジーを私の授業実践から紹介したい。

## 2. パラグラフの論理展開

1文を理解する際には、単語単位ではなく、「い

くつかの単語が集まって意味のあるまとまりを表す単位」を意識することが必要である。このようなまとまりをチャンク(chunk)という。同様に、テキストを理解する際には、文単位ではなく、パラグラフ単位でとらえるべきということ言うまでもない。一般に、パラグラフはトピックセンテンスとそれを補足するディテイルズ(details)から成り立つ。各パラグラフにトピックセンテンスは1つのみであるが、ディテイルズは、トピックセンテンスの内容を読み手に十分に理解してもらうためにいくつかのサポートセンテンス(support sentences)から成り立つ。

谷口(1992, pp. 115-41)によると、ディテイルズには、時間順の展開、空間的な展開、比較と対照、原因と結果、定義法、質問・答え展開法、具体例による展開法、分析法、論証法、再表現展開法、比喩展開法、分類法等の典型的な論理展開法がある。日本の検定教科書はパラグラフリーディングの基礎を身につけることを目的として作られているので、各パラグラフに必ずトピックセンテンスがあり、パラグラフの論理展開もわかりやすい。しかし、大学入試問題や一般的な文章ではかなり状況が異なる。

まず、トピックセンテンスの位置である。トピックセンテンスはパラグラフの最初にあることが多いが、中ごろや最後にあることもある。さらに、トピックセンテンスと呼ぶべきものがなく、テーマのアイデア(キーワード)だけが示される場合もある。

トピックセンテンスが最初にこない理由は2つある。1つは、最初の文が前パラグラフの内容をまとめることで、パラグラフ間の連結の役割を果たすためである。もう1つはパラグラフにおける論理展開を導入(introduction)、本論(body)、結論(conclusion)の3つの部分に分けて考えることで説明できる。導入は、持論を述べるにあたって前提となる知識や理解を読み手と共有する部分である。本論はテーマ(主題)と論拠を提示する部分であり、各パラ

グラフやテキストの大部分を占める。従来のトピックセンテンスとディテイルズを合わせた部分と考えればよい。ちなみに、本論にトピックセンテンスがあるとは限らないので、私の授業では、主題をトピックではなくテーマと呼んでいる。結論は本論の内容をまとめたりテーマを繰り返したりする部分であるが、トピックセンテンスが本論に明示的に書かれている場合は省略されることが多い。トピックセンテンスは本論か結論に置くので、パラグラフの中ごろや最後にくることになる。しかし、導入は省略されることが多いので、やはり各パラグラフの第一文は大切にすべきである。

次に、パラグラフの構成である。本論は複数パラグラフにまたがることもある。例えば、第1パラグラフは導入と本論①、第2パラグラフは本論②のみ、第3パラグラフは本論③と結論、といった構成である。また、どれか1つの論理展開法だけで本論が構成されていることは少ない。普通は時間順と原因・結果、比較・対照と空間順のようにいくつかの展開法が組み合わせられている。分析法のように、1つのテーマを2つか3つに分けてそれぞれについて論じることもある。この場合、1つのトピックセンテンスに対して複数のサブトピックセンテンスがあり、それぞれに対してディテイルズがある。つまり、1つの「導入—本論—結論」に対して、本論の中でさらに「導入—本論—結論」が重層的かつ複数並列して存在するということである。しかし、どんな場合でも、テキストとしては「導入—本論—結論」という展開は1つである。ただし、大学入試などでは紙面の都合上、導入や結論がカットされていることが少なくない。パラグラフリーディングはパラグラフの論理展開を把握することに主眼を置くが、書き手が伝えたいことをテキストとして理解することがリーディングの目的であり、この目的に向かう手段がパラグラフリーディングである。

パラグラフやテキストの論理展開が複雑になる場合、ディスコースマーカーが理解の助けになる。ディスコースマーカーは文と文のつながりを明示的に示す標識である。トピックセンテンスがパラグラフの最初でない場合、逆説のディスコースマーカー(however など)の後にトピックセンテンスがくることが多い。具体例による展開法では、冒頭に例証のディスコースマーカー(for example など)を使う

ことが多い。ディスコースマーカーに着目すれば論理展開を把握しやすくなるので、よく出るディスコースマーカーを一覧表にして生徒に提示し、適宜参照させることが望ましい。門田・氏木・伊藤(2006, pp. 142-50)が参考になる。

### 3. 文と文のつながり

ディスコースマーカーを使わなくても論理が展開していくし、ディスコースマーカーがない文でも内容的に重要なこともある。実際、生徒にとってはパラグラフの論理展開を把握するのは難しく、トピックセンテンスすら抜き出せないことも少なくない。パラグラフを理解するためには、もう少し精密に文と文の意味的つながりを理解することも必要である。1文を理解する際に単語を超えたチャンクという単位で考えたように、パラグラフを理解する際にも文を超えた単位で考え、そのまとまりごとの意味関係をとらえる必要がある。いくつかの文が集まって意味のあるまとまりを表す単位をセンテンスチャンク(sentence chunk)と呼ぶことにする。センテンスチャンクは、トピックセンテンスのように1文であってもよいし、サポートセンテンスのように2文以上であってもよい。

文と文は互いに関係し合いながらテキストに首尾一貫性(coherence)を生み出す。このような文相互の意味的つながりを結束性(cohesion)という。Halliday and Hasan(1976, pp. 295-97)が指摘するように、結束性の強さは常に変化している。センテンスチャンクとセンテンスチャンクの境目は結束性が弱まるので、生徒は論理展開を見失いやすい。持論に説得力をもたせるために、書き手は読み手からの予想される疑問や反論をもち出すことがある。この場合、前のセンテンスチャンクとの結束性が一旦かなり弱まるので、話の流れについていけずに暗中模索状態に陥ってしまうことが多い。

私は、パラグラフという大きな単位ではなく、センテンスチャンクというもう少し小さい単位で論理展開を把握するストラテジーを与える必要がある、と考える。私の授業では、文ごとの論理展開をまずは2つに大別しながら読むことを推奨している。1つは書き手の論理を展開していく本流(main stream)であり、読み手にとって次の展開を予想しやすい。もう1つは具体例・データの提示や、主に

読み手の論理を展開していく支流(subsidiary stream)である。支流は軽く読み流して、本流と本流をつなぐような読み方を意識すれば論旨を見失わないだけでなく、テキストのテーマを把握することも容易になる。本流の流れをより精密に分析する必要がある場合は、前の文に対する読み手のどのような問いに答えて次の文が展開されているのかを考えさせるようにしている。

### 本流(main stream)の主な論理展開

- (1) **言い換え**「どういうこと?」(What does it mean?)  
…同じことを別のことばで言い換えたり、抽象的内容を具体的表現を使って説明したりする。
- (2) **理由**「なぜ?」(Why?)  
…書き手の見解・視点・立場を提示するときは、必ずそれに対する理由が必要となる。
- (3) **展開**「それから?」(OK, And then?/How?)  
…話をさらに進めたり、問題に対する解決策や具体的方策を説明したりする。
- (4) **まとめ**「かいつまんで言うと?」(Sum it up.)  
…それまでの内容や見解をまとめる。パラグラフの最初か最後にすることが多い。

### 支流(subsidiary stream)の主な論理展開

- (1) **具体例・データ**  
…具体例・実例・データ等を挙げて、書き手の見解・視点・立場をわかりやすくする。
- (2) **比較・対照**  
…1つの観点に対して似たものや違うものを持ち出して、力点を置きたいことの特徴を浮き彫りにする。
- (3) **前提・一般論**  
…持論を展開するにあたり、それに関する知識・理解を読み手と共有する。

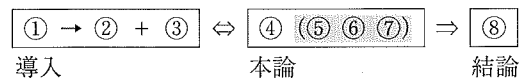
上記をふまえて、実際にパラグラフを見てみよう。

(例1)① Since the 1970s, zoos have strived to reproduce the natural habitats of their animals, replacing concrete floors and steel bars with grass, trees, and pools of water. ② These environments may simulate the wild, but the animals don't have to worry about finding food, shelter, or safety from predators. ③ All the necessities of life seem to be provided for them. ④ While this may not seem like a bad deal at first glance, the animals experience numerous complications. ⑤ The zebras feel as if they are constantly under threat, smelling lions every day and finding themselves unable to escape. ⑥ There is no possibility

of migrating or of hoarding food for the winter, which must seem to promise equally certain doom to a bird or bear. ⑦ In fact, the animals have no way of knowing whether the food that has magically appeared each day thus far will appear again tomorrow, and no power to provide for themselves. ⑧ **In short**, zoo life is utterly incompatible with an animal's deeply ingrained survival instincts.

(2012年5月施行 高3生対象「第1回駿台全国模試」第3問より抜粋)

(例1)では、②は①の展開、③は②の理由。④にはWhile this...「このことは…だけれども」という譲歩節があり、①②③までの流れとは違う流れを作り出そうとしている。⑤⑥⑦は④に対する具体例、⑧は④～⑦の内容をまとめている。以上の関係を図示すると次のようになる。



④からこのパラグラフのテーマは「動物園が抱える問題」であり、⑧からパラグラフとして「動物園の生活は動物の生存本能とは相容れないものだ」ということを言いたいのだとわかる。

トピックセンテンスは一般的には⑧ということになるが、テーマを提示しているという点では④もトピックセンテンスと言えるのではないか。第1文をトピックセンテンスと言う人もいるかもしれない。私の授業では、パラグラフの内容を一言でまとめたものがトピックセンテンスだと考えている。本論への導入となる①のような文をイントロセンテンスと呼び、テーマを提示する④のような文をテーマセンテンスと呼んでいる。もちろん、テーマセンテンス＝トピックセンテンスとなることも多い。

## 4. 大意要約

大学入試問題では、「要旨要約」と「大意要約」がある。要旨要約はテキストの要旨のみを書けばよいが、大意要約はテキストの「導入—本論—結論」をまんべんなく書く必要がある。大学入試の大意要約問題では、字数制限が設けられていることが多い。一般に「最小制限字数÷25+α」が書くべきポイント

ト数であることが多い。この算出式は英語に限らず他教科でも同じらしい。例えば、パラグラフ数が3の英文を「80～100字の日本語に要約せよ」という問題では、ポイント数は3～4ということになる。この問題の場合、ポイント数とパラグラフ数が同じなので、各パラグラフからトピックセンテンスを抜き出してまとめるという方向で解答を作成すればよい。パラグラフ数が5の英文を「80～100字の日本語に要約せよ」という問題なら、捨てるでもよいパラグラフがあると考えてよい。ここで述べた方法論はあくまで入試一般のテクニックであって、万能ではないことを断っておきたい。

大意要約をさせる場合、最初のうちは各パラグラフにトピックセンテンスが必ず含まれるものを使って練習すべきだが、慣れてくればテーマが非明示型のテキストでも練習することが望ましい。なお、英語で大意要約をさせる場合は抜き出したトピックセンテンスをパラフレーズする必要があるが、門田・野呂・氏木(2010, p. 114)が参考になる。

各パラグラフからトピックセンテンスを抜き出させる際に注意すべきことは、抜き出し方を教えることである。「トピックセンテンスを抜き出しなさい」という指示だけではクイズで終わってしまう。(例1)なら、ディスコースマーカーをチェックさせるとよい。結論のディスコースマーカー(In short)をチェックできれば、⑧がトピックセンテンスだと容易にわかるだろう。また、センテンスチャンクの展開を生徒と一緒に追っていくのも方法のひとつである。私の授業では、文章をプロジェクトで黒板に投影して支流は黒色で塗りつぶしている。本流となるセンテンスチャンクは、言い換えなら青色、理由なら緑色、展開はそのまま、まとめは黄色のように色分けしている。生徒には、言い換えなら[ ], 理由なら< >, まとめなら「 」, 支流部分なら( )のように記号を決めてセンテンスチャンクをチェックさせるようにしている。

各パラグラフから抜き出したトピックセンテンスを使って大意要約させる場合、テキストのテーマとトピックセンテンス、およびテキストの「導入—本論—結論」を必ず確認させている。多くの場合、テキストの本論には複数の「導入—本論—結論」という展開が副次的に出てくるので、副次的な本論とテキストの本論の区別がつかなくなり、テキストの論

理展開を読み誤る可能性が高くなる。こうした誤りを的確に指摘するためにも、テキストの論理展開とパラグラフの論理展開を分けて考えさせることが必要である。私の授業では、テキストの導入を表す部分の先頭にはI、本論にはB、結論にはCと書かせると同時に、各パラグラフの論理展開を黒板に図式化したり整理したりして、視覚的にとらえる工夫をしている。(例1)は第六段落までであるテキストの第一段落であるが、第二段落以降は、動物のもつ本能とは何か、それが発揮されないとうどうなるかという実例が示されている。つまり、このテキストのテーマとトピックセンテンスは第一段落にあり、Iは第一段落①から③、Bは第一段落④から第五段落、ちなみにCは第六段落となる。

## 5. おわりに

自立した学習者を育てるためには、必要な知識を教えることが必要である。文法の知識を抜きにして1つ1つの文を理解することができないのと同様に、ここで紹介した談話文法の知識を抜きにして文と文の関係を正しく理解することはできないと思う。従来の学校文法の他に談話文法も体系的に指導することが必要ではないだろうか。今後のご指導の参考になれば幸いである。

## 参考文献

- 門田修平・野呂忠司・氏木道人(編著)(2010)『英語リーディング指導ハンドブック』東京：大修館書店。
- 門田修平(監修・著)／氏木道人・伊藤佳世子(著)(2006)『決定版 英語エッセイ・ライティング』東京：コスモピア。
- 谷口賢一郎(1992)『英語のニューリーディング』東京：大修館書店。
- Halliday, M. A. K., & Hasan, R. 1976. *Cohesion in English*. New York: Longman.

(西大和学園高等学校教諭)